

赤い魚と子供

小川未明

青空文庫

川かわの中なかに、魚さかながすんでいました。

春はるになると、いろいろの花はなが川かわのほとりに咲さきました。木きが、枝えだを川かわの上うえに拈ひろげていましたから、こずえに咲さいた、真紅まっかな花はなや、またうす紅くれなひの花はなは、その美うつくしい姿すがたを水みずの面おもてに映うつしたのであります。

なんのたのしみもない、この川かわの魚さかなたちは、どんなに上うえを向むいて、水みずの面おもてに映うつた花はなをながめてうれしがったであります。

「なんとというきれいな花はなでしょう。水みずの上うえの世界せかいにはあんなに美うつくしいものがたくさんあるのだ。こんどの世よには、どうかして私わたしたちは水みずの上うえの世界せかいに生うまれ変かわってきたいものです。」と、魚さかなたちは話はなし合あっていました。

なかにも、魚さかなの子供こどもらは躍おどり上あがって、とどきもしない花はなに向むかって、飛とびつこうと騒さわいだのです。

「お母かあさん、あのきれいな花はながほしいのです。」といいました。

すると、魚さかなの母ははおや親おやは、その子供こどもをいましめて、いいますのには、

「あれは、ただ遠とほくからながめているものです。けっして、あの花はなが水みずの上うえに落おちてきた

とて食べてはなりません。」と教えました。

子供らは、母親のいうことが、なぜだか信じられなかった。

「なぜ、お母さん、あの花びらが落ちてきたら、食べてはなりませんのですか。」と聞きました。

母親は、思案顔をして、子供らを見守りながら、

「昔から、花を食べてはいけないといわれています。あれを食べると、体が変わりができるといふことです。食べるなどいうものは、なんでも食べないほうがいいのです。」といいました。

「あんなにきれいな花を、なぜ食べてはいけないのだろう。」と、一ぴきの子供の魚は、頭をかじりました。

「あの花が、この水の上に、みんな落ちてきたら、どんなにきれいだろう。」と、ほかの一ぴきは目を輝かしながらいいました。

そして、子供らは、毎日、水の面を見上げて、花の散る日をついて待っていました。ひとり、母親だけは、子供らが自分のいましめをきかないのを心配していました。

「どうか、花を私の知らぬまに食べてくれぬといいけれど。」と、独り言をしていました。木々の咲いた花には、朝から、晩になるまで、ちようや、はちがきてにぎやかでありましたが、日がたつにつれて、花は開ききつてしまいました。そして、ある日のこと、ひとしきり風が吹いたときに、花はこぼれるように水の面にちりかかったのであります。

「ああ、花が降ってきた。」と、川の中の魚は、みんな大騒ぎをしました。

「まあ、なんとというりつばさでしょう。しかし、子供らが、うっかりこの花をのまなければいいが。」と、大きな魚は心配していました。

花は、水の上に浮かんで、流れ流れてゆきました。しかし、後から、後から、花がこぼれて落ちてきました。

「どんなに、おいしかろう。」と、三びきの魚の子供は、ついに、その花びらをのんでしまいました。

その子供らの母親は、その翌日、我が子の姿を見て、さめぎめと泣いたのでした。

「あれほど、花びらをたべてはいけないといったのに。」と、黒い子供の体は、いつのまにか、二ひきは、赤い色に、一ひきは白と赤の斑色になっていたのでした。

母親ははおやの歎なげいたのも、無理むりはありませんでした。この三びきの子供こどもが、川中かわなかでいちば
目立めだって美しく見みえたからであります。そして、川かわの水みずは、よく澄すんでいましたから、
上うえからでもものぞけば、この三びきの子供こどもらが遊あそんでいる姿すがたがよくわかったのであります。
「人間にんげんが、おまえらを見みつけたら、きつと捕とらえるから、けつして水みずの上うえへ浮ういてはな
らないぞ。」と、母親ははおやは、その子供こどもらをいましめました。

町まちからは、こんどは、人間にんげんの子供こどもたちが毎まい日にち川かわへ遊あそびにやってきました。
町まちの子供こどもたちの中で、川かわにすむ、赤い魚あかさかなを見みつけたものがあります。

「この川かわの中に、金魚きんぎよがいるよ。」と、その魚さかなを見みた子供こどもがいました。

「なんで、この川かわの中に金魚きんぎよなんかがいるもんか、きつとひごいだろう。」と、ほかの
子供こどもがいました。

「ひごいなんか、なんでこの川かわ中なかにいるもんか。それはお化ばけだよ。」と、ほかの子供こどもが
いました。

けれど、子供こどもたちは、どうかして、その赤い魚あかさかなを捕とらえたいばかりに、毎まい日にち川かわのほと
りへやってきました。

町まちでは、子供こどもたちの母親ははおやが心配しんぱいいたしました。

「どうして、そう毎日川へばかりゆくのだえ。」と、子供たちをわかりました。

「だって、赤い魚がいるんですもの。」と、子供は答えました。

「ああ、昔から、あの川には赤い魚がいるんですよ。しかし、それを捕らえるとよくないことがあるというから、けっして、川などへいつてはいけません。」と、母親はいいました。

子供たちは、母親がいったことをほんとうにしませんでした。どうかして、赤い魚を捕まえたものと、毎日、川のふちへきてはうろついています。

ある日のこと、子供たちは、とうとう赤い魚を三びきとも捕まえてしまいました。そして、家へ持つて帰りました。

「お母さん、赤い魚を捕まえてきましたよ。」と、子供たちはいいました。

お母さんは、子供たちの捕まえてきた赤い魚を見ました。

「おお、小さいかわいらしい魚だね！ どんなにか、この魚の母親が、いまごろ悲しんでいるでしょう。」と、お母さんはいいました。

「お母さん、この魚にもお母さんがあるのですか？」と、子供たちはききました。

「ありますよ。そして、いまごろ、子供がいなくなつたといつて心配しているでしょう

。「と、お母さんは答えました。」

子供たちは、その話をきくとかわいそうになりました。

「この魚を逃がしてやろうか。」と、一人がいました。

「ああもう、だれも捕まえないように大きな河へ逃がしてやろう。」と、もう一人がいました。子供たちは、三びきのきれいな魚を町はずれの大きな河へ逃がしてやりました、その後で子供たちは、はじめて気がついていいました。

「あの三びきの赤い魚は、はたして、魚のお母さんにあえるのだろうか？」

しかし、それはだれにもわからなかったのです。子供たちはその後、気にかかるので、いつか三びきの赤い魚を捕まえた川にいつてみましたけれど、ついにふたたび赤い魚の姿を見ませんでした。

夏の夕暮れ方、西の空の、ちやうど町のとがった塔の上に、その赤い魚のような雲が、しばしば浮かぶことがありました。子供たちは、それを見ると、なんとなく悲しく思ったのです。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 3」講談社

1977（昭和52）年1月10日第1刷発行

1981（昭和56）年1月6日第7刷発行

初出：「金の塔」

1922（大正11）年9月

※表題は底本では、「赤《あか》い魚《さかな》と子供《こども》」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：本読み小僧

2012年7月16日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

赤い魚と子供

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>